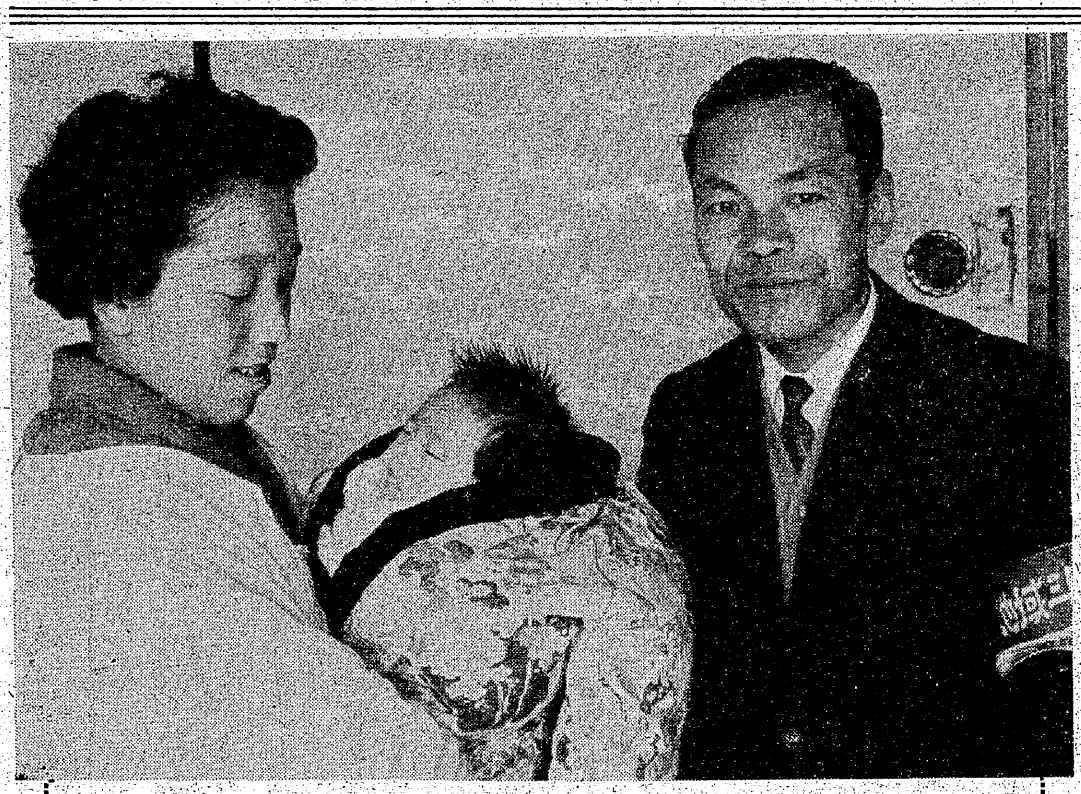
原告団

遺族・CO裁判、災害責任追及、特集号

第百八十七号



写真は、昭和35年正月、生後2ケ月の洋子（ひろこ）さんをはさんで、原万田社宅での一コマ。洋子さんの成長記としてのアルバムも、ここから始まる。そして、この年は火と燃えた三池闘争の年でもあつた。

原告団レポート

遺族――

高田 寿子さん

裁判引き延ばし許せず

くやしいときには仏壇の鐘をひっぱたく

前向きに、と生きてきたが……

苦しい勤め

大牟田市内、竜湖瀬の閑静な住宅地の一角に、高田寿子さんの住いを訪ねたのは、暑い日だった。

高田さんが長年住みなれた原万田社宅から転居してきた当時は、七、八軒ぽつしかなかった住宅も今は高台の方にまでのびて、竜湖瀬堤も埋めたてられている。

こと、正確には竜湖瀬町三三の二三という現住所に移ってから早くも九年目になるそうであるが、五十坪の土地に建てられた十八坪のささやかな住いである。建売り同然だったが、退職金を引き当てにして共済資金を借り、思いきって買ったとか。

この家だろうと目星をつけて玄関に立つと、表札は〝高田明〟とある。そういえば遺族の住いには亡くなった夫の名を、そのままにしてあるのに出会うことがたびたびある。それも理由のあることだが――。

高田寿子（ひさこ）さんは、小学校の教師。現在も、大牟田市内のある小学校に勤務。五十六歳。「勤めはどのくらいに」と聞くと大きな笑い声とともに、「三十六年ですよ」と、ちょっと恥しそうに。また「なぜかくたびれた感じで」とも。

年忌をするたびに、体の具合が悪くなるという寿子さん。十年ほど前からは腰痛などで悩まされているそうである。「もう来年ぐらいには辞めたい」と、最近の心境を語ってくれた。

組合活動へ

寿子さんの夫、高田明さんは昭和二十三年十一月の入社というから、戦後の復興期、石炭産業の増産政策強行のもとで、炭鉱労働者優遇措置もあって、復員者・戦災者・引揚者などが急速に炭鉱に流入した時期もようやく峠を越し、翌二十四年には石炭統制が撤廃されているから、もう終りに近い採用者だった。

大正十年六月生まれで、大牟田市本町出身の明さんは、三池工業電気科を卒業、朝鮮の電気会社に勤めたのち、戦争の足音が高くなるとともに幹部候補生として兵役へ。

この辺の事情については、寿子さんもよく判らないという。あまり話をしなかったようで、「長い剣をさげた少尉」など断片的な記憶があるだけ。その後、樺太（からふと・現在のサハリン）で終戦。シベリアでの抑留生活を経て、最後の引揚船で帰国。家は「大牟田の空襲」で焼失していた。

明さんはやがて内電工となる。職場・地域の役員を経験し、二十六年から五年間は三川支部の教宣部員として、組合活動に専従している。

その後、電気分会の委員、原万田の地域分会長などをつとめ、三池闘争ではむろん積極的にたたかい、分裂後から爆発時まで電気分会分会長の任務にあった。

夫としては

「責任感の強い人だった」と寿子さんは、今は亡き夫を追想する。二人が結ばれたのは昭和二十五年十月。遠い親せきにあたる人の紹介で、見合い。「なにかこわい感じの人」だったという。

結婚当初は、荒尾の倉掛での借家生活を経て、原万田社宅百三十五棟へ。「昔の話や、家に帰ってから職場のことなど、あまり話さなかった」ということだが、組合活動や、民生委員などの仕事で忙しかったのだろうか。当時では、奥さんが勤めるというのも少なかったが、すれ違いの生活もあっただろうし、立場上、家に出入りする人も多かったらしい。酒も好きな方で、付き合いも多かったことなどが理由になるかも――。

「私の父が死ぬときに『下見もせずに済まんじゃった』といってりましたから、娘に苦労させたと思っていたのでしょうね」という言葉は、妙にひびきがあった。

「勤めはどのくらいに」と聞くと大きな笑い声とともに、「三十六年ですよ」と、ちょっと恥しそうに。また「なぜかくたびれた感じで」とも。

年忌をするたびに、体の具合が悪くなるという寿子さん。十年ほど前からは腰痛などで悩まされているそうである。「もう来年ぐらいには辞めたい」と、最近の心境を語ってくれた。

組合活動へ

寿子さんの夫、高田明さんは昭和二十三年十一月の入社というから、戦後の復興期、石炭産業の増産政策強行のもとで、炭鉱労働者優遇措置もあって、復員者・戦災者・引揚者などが急速に炭鉱に流入した時期もようやく峠を越し、翌二十四年には石炭統制が撤廃されているから、もう終りに近い採用者だった。

大正十年六月生まれで、大牟田市本町出身の明さんは、三池工業電気科を卒業、朝鮮の電気会社に勤めたのち、戦争の足音が高くなるとともに幹部候補生として兵役へ。

この辺の事情については、寿子さんもよく判らないという。あまり話をしなかったようで、「長い剣をさげた少尉」など断片的な記憶があるだけ。その後、樺太（からふと・現在のサハリン）で終戦。シベリアでの抑留生活を経て、最後の引揚船で帰国。家は「大牟田の空襲」で焼失していた。

明さんはやがて内電工となる。職場・地域の役員を経験し、二十六年から五年間は三川支部の教宣部員として、組合活動に専従している。

その後、電気分会の委員、原万田の地域分会長などをつとめ、三池闘争ではむろん積極的にたたかい、分裂後から爆発時まで電気分会分会長の任務にあった。

きめた覚悟

三十八年十一月九日、高田明さんは三川鉱の坑内にいた。さめきれぬ悪夢――炭じん爆発が起こった。土曜日のその日、寿子さんは学校から帰り洗濯に余念がなかった。ものすごい爆発音を、はっきり聞いた。社宅のガラス戸がガタガタと鳴った。なに事が起こったのかわからない。

夕刻になって知らせがあり、組合事務所に走った。坑内が大変らしいということはわかったが、事情が確かめられないまま、一たんは帰宅。夜九時過ぎになってからふたたび家を出た。そして夜明かしとなった。

妹婿（南場さん）の話しでは、宮浦にあがった明さんを確認したというのであるが――。明さんは帰ってこなかった。おそらく、一度は健在で救出されたのであろう。その性格からか、引き返したにちがいない。そして、ついに――

翌十日になって、常日頃なにかにつけてお世話になっていた隣りの松田さんが、夜を徹して走りまわり、ついに姿をかえた明さんを確認。運命の境目に立って涙する寿子さんだった。

この年には、家庭に専心するつもりで、保険のある在職中にと左耳の大手術をして、学校を辞めるつもりであった。

悲しみ、怒り、葬儀を終えるまで足が地につかない状態だったがようやく一息ついてみると、三歳の洋子（ひろこ）さんを抱え、教師としての仕事の重み、ここでひとつの覚悟を決めなければならなかった――。

遺児は成長

結婚して九年目に生まれた洋子さんは、いま二十一歳。荒尾三小から大牟田歴木中、そして大牟田南高校から香蘭女子短大を卒業。保育・保母の資格を取得しているけれど、近辺では就職はないとのこと。いまは母娘の二人ぐらし。

寿子さんが「この子が小さい頃は病弱で、病院をたずねてよく歩きました。こわいとかなんとかではなく、なりふり構わず……」と語るように、当時は養育に無我無中だった。

「教師としての自分の仕事もあり、ずいぶん悩んだりもしましたが、ほかにも苦しい人がたくさんいる、と自分にムチうってがんばりました」

こんな状態だったから「遺族としての活動、いろんな集会や行動にはあんまり出られなかったのが済まない」

隣りに住んでいた松田さんには、「洋子の親がわりみたいに、ほんとになにからなにまでお世話になりました」と、周囲の人々の支援に心から感謝する。

爆発の時には、父親の棺に近ずこうとしなかった洋子さん。「小さい頃、帰宅した父がよく自転車に乗せて酒屋に連れていってくれた」という思い出がある。近所の人も、母よりも父と一緒にいる方が多かった、と話している。

また、洋子さんの誕生から始まる一冊のアルバムは、洋子さんの成長記として、明さんが亡くなる年に整理された。三輪車に乗って無心に遊んでいる写真で終っている。あとがないまま、半分ほどのページが残されているのが悲しい。

現在すでに退職して佐敷（さしき）に居られる松田さんのことを父ちゃん、母ちゃんと呼んで、今でもときどき顔を見せに行くという。父親がいないという思いは、小学校卒業するまであまり思わなかったし、毎日の生活から勉強まで見てもらった。そんな援けが身にしみてうれしいという洋子さんも、立派に成人して就職と結婚というところまできている。

怒り新たに

寿子さんは心臓も悪いし、ケン症炎もと、つぶやくようにもらしたが、「この娘が病気の時が一番つらかったけれど、七五三、成人式、そして進学、就職となるにつれて、父親が居たらなあ、とつくづく思う……」「くやしいと思う時は仏壇の鐘を力いっぱいたたくんですよ」という。

また、「仕事の関係で年に二回ぐらいしか行けないけど、裁判の法廷では慣りが新たになる思いで資本というものは、と再確認して帰ってくる」そうだ。つい先日の裁判では、わずかな時間だったし「いまの会社の姿勢は、引き延ばしだとしか思えないし、早く勝利で解決しなければ」と訴える。

そして「原万田の皆さんには大変お世話になって済まない。くれぐれもよろしくお伝えください」と。

×

――人に頼ってはいけない、なんとか前向きで――と懸命に生きてきた寿子さんだが、責任追及、損害賠償のための長い裁判も、ようやく山頂にさしかかった昨今、共同の足どりに、〝この日なきため〟の意味をさぐりつづけている。

写真は現在の高田さん親娘。